

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470800281		
法人名	医療法人 愛敬会		
事業所名	認知症対応型共同生活介護事業所グループホーム若の山荘		
所在地	三重県伊勢市楠部町若の山2605-13		
自己評価作成日	平成24年11月22日	評価結果市町提出日	平成25年2月27日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku_ip/24/index.php?action_kouhyou_detail_2012_022_kani=true&amp;JigyouvoCd=2470800281-00&amp;PrefCd=24&amp;VersionCd=022">http://www.kaijokensaku_ip/24/index.php?action_kouhyou_detail_2012_022_kani=true&amp;JigyouvoCd=2470800281-00&amp;PrefCd=24&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成24年12月3日

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは手づくりをモットーとして活動しています。食べる楽しさと作る楽しさを感じて頂きたい思いで、彼岸のおはぎを作ったり、お雑煮、七草粥、節分の恵方巻き等四季折々の行事食を利用者様と一緒につくっています。その他、七夕の飾り付けや願い事を書いてもらい利用者自ら何らかの形で参加する事が大切を考えて日々生活支援に取り組んでいます。夜間の良眠を促す為に湯たんぽや生姜湿布も実施しています。また、年末年始には、門松づくりやおせち料理や餅つきを行っています。生活そのものの質を向上させる為に、日常生活の中で排泄介助・食事介助・入浴介助等を支える中で、楽しみづくりが次への活力となると信じて全職員で日々精進しています。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

人それぞれの能力・その人の得意な事・希望等を察して、出来る事は役割を持って、ひとり一人の体調を配慮しながら、その日その時の利用者の気持ちを尊重し、出来るだけ個性のある支援を行っている。職員と一緒に今までの生活習慣を考え、意向・思いが変わらぬ様に継続したいと考え支援している事業所である。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	設立当初からのいきいき人生のびのび人生をモットーにして、その人らしい生活を支援すると共に本人の意思を尊重して地域との交流を図っている。各職種の専門性を基本に個別ケアを職員の得意分野を活かして取り組んでいる。	毎月の会議で利用者の思い・意向を把握している。今までの生活の中で利用者の持っている自分の得意な分野を活かし、その人らしい生活作りを理念にして、職員間で共有している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	隣接する老健の行事や月一回の外出行事を通じて地域との交流を図っている。家族様も本人様にとって重要な地域であり知人も含めて繋がりを持つ様に毎月の手紙や面会時に、面会機会を持ってもらえる様に促していく。	毎年開催される地域行事「萬歳楽」に利用者や参加したり、数多くのボランティアも来訪している。民生委員が菊作りに来たり、地元の方、家族からも花、野菜、季節の果物等を頂いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々に集まってもらい定期的に運営推進会議を持ち、荘の生活を知ってもらうと共に理解をしてもらっている。運営推進会議の中で、認知症についての基礎知識をつ伝え、映像で見ってもらう機会ももうけている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所活動状況や利用者の状況や外部評価結果報告やそれに対する改善の取り組み報告を実施している。平成24年は年6回の実施を計画し実施中である。家族・地域・行政の参加は協力的で若の山荘だよりを中心に現状報告と意見交換をしている。防災についての学習機会も設けており地域の活動についても知る様に努めている。	年間行事に年6回、開催予定を組み入れ実行している。議題を毎回提案し、市役所職員、区長、家族等で意見交換されている。また、時々、医師である理事長から医療の話題もされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市役所とも連携を取る様に努め、行政からも協力要請があれば前向きに対応し協力する様に努めている。運営推進会議には市は協力的に参加してくれている。管理者中心ではあるが相談にものってもらっている。	解らない事、あるいは相談をしに訪問しているが、運営推進会議で市担当者とは常に情報交換を行い、協力を関係構築している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についての社内研修を持ち全職員が理解し拘束をしないケアに取り組んでいる。玄関には鍵を閉めておらず、利用者は自由に入出り出来る様になっている。日向ぼっこも自由にでき日中に外の景色を見に行く利用者も見られる。	職員は振り返り日誌の中でいつも拘束について意識しており、管理者も随時、不適切ケア等の資料を職員に配布し意識付けをしたり、職員ケア研修にも数多く参加し、拘束をしないケアを実践している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	会議等の機会に高齢者虐待防止法を学ぶ様にしている。日々の生活支援の中で、無意識にしまっている虐待は無いかを話し合い心のケアに日々努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症を抱える利用者を守る為に成年後見制度を利用し、本人の財産と生命を守る取り組みを一名実施している。又、社内研修にて職員の理解を促し共有にも繋げている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には時間をかけて疑問点が無いか確認しながら利用料金や重度化方針や看取りについて本人様・家族様の意向を確認しながら説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置して、アンケート用紙の内容も簡潔にして意見を出しやすい環境に努めている。苦情や要望が有れば可能な限り迅速に対応する様に努めている。今年度も介護相談員の派遣を導入し利用者の相談にのってもらっている。	以前の意見箱の記入用紙を変更したら、投書が増え意見を把握している。出された意見は運営推進会議で計り、また、面会に来訪した家族にも聞き、苦情相談票に記入し反映している。特に若の山荘だよりは理事長、ホーム長、家族との意見交換の場となっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	会議時に職員の意見を聞いている。日頃の仕事の中でも利用者のより良い生活にする為の意見は出し合っている。会議の場等で出た意見はケアプランや日常業務に反映させている。認知症進行予防の取り組みも個別の内容を実施している。	月2回会議で意見交換を行う場を設け、出された意見はホーム長と検討し反映している。現在の浴槽は大きすぎるので安心・安全(プライバシーも考え)に入浴出来る様に、個浴槽に改修提案の依頼があり、反映に結びつけた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は一人一人の職員の得意分野や能力に応じて役割を持たせる事でやりがいをもち、仕事を笑顔で出来る様に環境整備に努めている。勤務内容と就労時間を検討して勤務形態についても適時検討している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	パート職員も含めて社外研修を積極的に取り入れている。会議にて研修報告をする事で研修内容の共有も図っている。得意分野やどんどん活躍してもらい、苦手分野についても毎月の振り返りシートを活用で克服を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス協議会定例会や同業者の開催する研修会への参加を通じて交流の機会を持ち、サービスの向上に努めている。伊勢度会地区防災検討会でも、防災やその他もろもろの意見交換と交流を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期面談で生活状況を把握する様に努めると共に、本人と家族の思いを聞き取る様にしている。センター方式を記入してもらい家族様は利用者思いをはせて、今後の生活について共に考えるきっかけとして有効に活用している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでの家族の苦労や当事業所の入所にいたる経緯について聞くように努めている。インタビュー面談で不安を取り除く事が出来る様に丁寧に話をしている。センター方式も有効に活用している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人や御家族の思い、現在置かれている状況等を確認し、今後どのような生活を希望しているのかを御家族と話し合い、提案・相談を適時実施する事で信頼関係を築ける様努め、必要なサービスに繋げる取り組みを実施している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	支援する側、支援される側という意識は捨てて、利用者・職員共に得意分野を活かして、生活そのものをリハビリの対象として、各利用者の身体状況にあった生活パターンを実践している。利用者先生役になってもらう機会を創っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者の生活状況を毎月一回手紙で連絡したり必要な事や変化があった時には適時連絡を実施している。夏祭りでは、家族様にも参加してもらい利用者の生活に笑顔と喜びが持てる機会を設けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者の御家族の面会・外出・外泊やこれまでの生活習慣の中での知人(教会)の訪問も継続している。また、行事に御家族が参加する事で、利用者との繋がりを支援している。	外出したときは懐かしい店に寄ったり、美容院にも行っている。また、職員と外泊旅行に行く利用者もいる。年賀状も出したりして、職員は馴染みの場所、思い等を把握し支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	毎日の3時のおやつ時間や食事の時間は、職員も一緒にして会話を持つ事で利用者同士の関係が良くなる様に環境整備に努めている。相性もあり、席については適時検討して変更している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	体調を崩し病院に入院した方は、職員が入れ替わり見舞っている。ターミナルケアの延長線上にグリーングケアを考えており、一年に一回、亡くなられた利用者のご家族の家を訪問して、手を合わせる事を今後考えている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中で利用者と一緒に会話したりする事で、何気ない会話から思いを汲み取る様にしている。言葉にはっきりとやらなくても表情やしぐさで気持ちを察して声をかける様にしている。センター方式や初期面談での聞き取りも重視している。	センター方式を取り入れ、利用者との日常会話の中、表情で思いや意向を把握している。また、家族には若の山荘だよりの作成時に聞いたり、面会時には場を設け、話を聞いている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式の活用はもちろんの事、日常生活の中で隣に座ってゆっくり話をしたり、一緒に洗濯たたみや将棋をする中で何気ない会話からどのような暮らしをしてきたか把握し、家族・知人の情報も適時収集している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活全体・心理状態に常に視点を持ち、したいこと・したくない事・出来る事・出来ない事を一人一人見極めて、どのような生活の働きかけをするか全職員で考えて意見を出し合い生活支援を実施している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人や御家族には日頃の関わりの中で思いや意見を聞き反映させる様にしている。毎月の会議で各利用者の生活状況を検討し、アセスメントから具体的なケア内容まで話合っている。基本的には3ヶ月毎と必要時の見直しをしている。	職員は担当者別に課題の経過・評価をし、意見を出し合って会議を開催している。利用者・家族には計画書案の下欄に職員間で検討した結果を記入し、意見を聞いている。毎月モニタリング・評価を行い、3ヶ月毎に見直し作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別ファイルを用意し、心身の状況及び日常生活の様子を本人の言葉やエピソードを交えて記録している。全職員がいつでも確認できる様になっており、勤務時間開始前に申し送りをして状況を共有して適切な支援に繋げている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人、御家族の状況に応じて必要な支援は柔軟に対応して、利用者一人一人の満足に繋がる様に日々実践している。個別リハビリ、足つぼマッサージ・将棋・紙芝居・読書等関心のあるものを働きかけ参加してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者が安心して地域の中で暮らし、生活の中に楽しみを持てる様に、民生委員から毎年菊の提供をしてもらっており散歩の時に花をみて楽しんでいる。また、行方不明者があれば、警察や地域(楠部町)にも協力をお願いしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人や御家族が希望するかかりつけ医となっている。基本的には家族同行の受診が基本であるが、受診や通院は御家族・本人の希望に応じて対応もしている。月2回の往診や随時の診察・往診も実施して、専門医の診察が必要であれば御家族の協力を得て診察にいらっている。	家族の了解を得て、全てが協力医である。受診は家族に依頼し、出来ない時は事業所で支援する。月2回往診があり、理事長は医師である為、緊急時にも安心である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、常に利用者の健康管理や状態変化に応じた支援を行えるようにしている。介護職員と看護職員とかかりつけ医の連携は常に取っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、本人への支援方法に関する情報を医療機関に提供し、交代で職員が見舞いをしている。又、御家族とも情報交換をして回復状態から今後の生活の場をどうするのか、終末期の過ごし方も含めて意向確認して、連携している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に伴う意思確認書を作成し、対応しうる最大のケアについて説明を行っている。まず、本人の気持ちを大切に御家族と話し合い御家族と当事業所が共に利用者が安心して終末期を過ごせるように取り組んでいる。若の山荘で一例最後を迎えた利用者がある。選択肢の一つと考える。	利用者と家族の状態を考えて話し合い検討して、主治医指示の下、意志確認書で方針を決めている。事業所としては終末期に向けて過ごせるように取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の協力を得て救急手当や心肺蘇生法の知識を全職員が習得できる様に何らかの形で取り組んでいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の協力を得て避難訓練・避難経路の確認・消火器の使用法等の訓練を定期的に行っている。災害全般(地震)についても市役所危機管理課の協力で講義をしてもらい、地震体験車も体験している。	月2回昼と夜間、利用者と避難訓練をしている。トイレの水洗の水、3日分の食材、ヘルメット、防災頭巾、布団、書類の非常持ち出し袋を完備し、運営推進会議でも意見交換している。また、地域密着サービス事業所の防災ネットワークの協力体制を築き、防災検討会議も開催している	災害はいつ発生するか分からないので、度重なる細やかな訓練と地域の連携(協力体制、情報交換、地域住民への避難場所の提供)が検討実施される事を期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室で過ごしたい人やその日の気分や体調を配慮して、さりげない誘導や声かけを心掛けている。一人一人のその日に合わせて無理強いせず行事やイベントに参加出来る様に声かけしている。	その日その日の本人の希望・体調に配慮し、束縛の無い日々を送るように支援したり、強調しない言葉に気をつけ、本人にはさりげなく声かけをしている。また、居室への入室時には必ず声を掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者に合わせ声かけ傾聴し会話の中から本人の決める場面も作っている。誕生会等は本人の希望を聞き出来る限り献立に反映させている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝の苦手な人やよっぱりな人には無理強いせず柔軟に対応する様に心掛けている。本人の気持ちを尊重して出来る限り個別性のある支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	朝の着替えは本人の好みの服を考えてもらうようにしている。個々の生活習慣に合わせて本人が気に入った服を選んでもらっている。馴染みの理容室に行ってもらったり一緒に買い物にもいつている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	盛り付けや食事の準備から片付けまで職員と一緒に役割分担をして実施している。	献立は職員が毎日考え、食材を揃え調理している。その日その日に何が出るかと食事が楽しみである。地域住民・家族から頂いた季節の野菜も使い、芋茎を使った懐かしい一品もある。月1回は季節メニューがあり、行事食は利用者の好物が出される。また、役割を考え、盛り付け・後片付け・食器洗いを手伝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日に十分な水分を取ってもらえる様食事以外にも10時、15時の水分摂取と、寝る前及び夜間にも水分を取ってもらえる様に支援している。食事の献立も個々の好みを考慮している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食べた後磨く・ゆすぐを一人一人に合わせて口腔ケアを実施している。就寝前に義歯を預かり洗浄剤につける等清潔に保てる様支援している。自歯がある人には自分で磨いてもらえる様声掛けをし自分で磨けない人には職員が手伝っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄確認表を使用し周期的にトイレ誘導しトイレでの排泄習慣が出来る様に支援している。失敗した場合でもさりげない声かけで、トイレ誘導して温タオルで拭く等気持ちよくさっぱりして頂けるよう配慮している。	本人の表情・状態を見て、あるいは排泄確認票を使い、声かけによりトイレに誘導し、排泄はトイレで出来るよう支援している。また、夜間時は個々に合わせた排泄支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	繊維質の多い野菜や海藻類を多く使いヨーグルトは毎朝つける等便秘予防に取り組んでいる。又散歩やリハビリの一環として車椅子の方や歩行が困難な方でも歩いてもらう機会を創っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	食事の後に風呂に入りたい方は希望どおり入ってもらえる等、職員の都合ではなく利用者の希望に沿う様に配慮している。昼間の入浴だけでなく、夜の入浴も月に4～5回程度設けている。	最低週3回の入浴支援をしているが、希望に合わせて朝・昼・夕、時間関係なくいつでも入浴が楽しめる。また、季節湯(菖蒲湯、柚子湯等)もある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中一時間くらい昼寝をしてもらっている。畳コーナーでも眠たい方には適時休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	本人に手渡しきちんと服薬出来ているか確認をしている。便秘薬はそれぞれ各自の状態に合わせて服薬してもらっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	月に一回お茶会や生け花の機会を設けている。師範をしていた利用者には、お茶の作法を指導してもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	馴染みの床屋に出かけたり、外食を適時行っている。ジャスコ買い物ツアーや月一回の外出行事で外出の機会をつくっている。	食材の買出し時にスーパーに同行している。毎日隣の施設の広場まで散歩に行ったり、玄関の外にある木製長椅子に座り景色を眺め、気分転換している。年1回買い物ツアーやドライブを兼ねて花見、外・内宮へ参拝、みかん狩り等楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分で支払いできる人には、外食やマッサージの時に本人に手渡している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の訴えが有れば御家族様に電話をかけたり手紙を送れる様に支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花や皆で作った貼り絵などを飾り、行事の様子等の写真にコメントを付けて貼りだし、いつでも見れるようにしている。	テレビの前に畳コーナーがあり、くつろげる空間となっている。食堂は広く食事後は全員で歌を歌ったり、朗読・紙芝居等を楽しみ、壁には伊勢市の今昔として歴史を物語る市電車が通る町の風景写真が掲示されている。また、季節の貼り絵が飾っており、四季感がうかがえる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビの前は畳スペースになっており、そこで横になって休んだり、テレビを観たり出来る様にしている。また、入居者が互いに訪室し仲良く話をしたりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家人協力のもと馴染みの家具などが有り安心して落ち着いて暮らせる様に支援している。また、家族との写真や毎月毎のカレンダーや生花などを居室内に飾っている。	使い慣れた椅子・キャビネット等が持ち込まれ、生花、季節の寄せ植え鉢が置かれ、また、個々の習い事、趣味、経験を活かし作り上げた作品が飾れている為、今までの様な自室同等に感じられる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	本人の活動性を維持する為に、個々に合わせて車椅子やシルバーカー等を取り入れている。歩行状態や立位状態も常に確認しながら支援している。		